

## 池谷仙之先生のご逝去を悼む

著者	和田 秀樹
雑誌名	静岡地学
巻	103
ページ	33-35
発行年	2011-06-23
出版者	静岡県地学会
URL	<a href="http://doi.org/10.14945/00024729">http://doi.org/10.14945/00024729</a>

## 池谷仙之先生のご逝去を悼む

和田 秀 樹

静岡県地学会前会長、池谷仙之先生は、2010年11月4日、肺ガンのため満72年と6ヶ月のご生涯を閉じられました。静岡県立総合病院に入院されていたのは約5ヶ月間でしたが、ほぼ1年前から末期ガンにおかされながら、抗ガン剤の点滴のため毎週病院に通われ、入院されてからは放射線治療も加わりましたが、エネルギー補給は点滴のみ、その後の奇跡は起きませんでした。先生のガンとの関わりは、10年ほど前にさかのぼります。2000年11月人間ドックのX線撮影により、小さな肺の異変が見つかり、すぐに県立総合病院で精密検査をした結果、ごく初期の肺腺癌と診断された事に始まります。このときは、翌2001年夏に、静岡開催は2回目となるオストラコダの国際会議が予定され、池谷先生は大会委員長で主催することもあり、2001年春休みに急ぎの手術をして、左の肺を半分摘出されております。この手術は、大成功でその後の回復も順調、7年経っても再発の兆候はなく、先生自身はもちろん、疑う事なく完治したと誰もが胸を撫で下ろしました。池谷先生は、1999年度から2006年度末まで8年間静岡県地学会会長を務められましたので、先生のご病気の変化は、会長職を退いてからの事になります。それまでに1996年の静岡県自然史博物館設立推進協議会設立への静岡県地学会の参加に始まり、NPO静岡自然史博物館ネットワークの立ち上げ、初代理事長職をつとめられ、現在あるNPOの状況に到達するまでの過程は、池谷先生のご努力と熱意とその手腕に大きく負っていることは誰もが認めるところです。残念ながら先生は、NPO理事長のまま博物館の完成を見ずに亡くなられてしまいました。池谷先生の亡き後、博物館の実現の動きが見えてきたことを考えると、この先の具体的計画をたてるにあたり、



図1. 2005年新茶のころの池谷先生。

要の池谷さんの不在を如何に補うか、県地学会もNPO静岡自然史博物館ネットワークにとっても言い尽くせぬ悲しみと落胆、そして喪失感を覚えますが、我々は、それを乗り越えるべきときがきたことを悟らねばなりません。

池谷先生と静岡県地学会との出会いは、1970年4月静岡大学理学部助手として赴任されたときにさかのぼります。戦後生まれの第一次ベビーブーム世代の大学入学の時代を迎え、1965年に文理学部を改組して設立された理学部にはまだ地球科学科はなく、地学履修コースという学部内の共通講座（定員5名）が設置され、将来地学教室が学科となることを目指しておりました。私もちょうど4年に進級したときになります。池谷先生は、東京大学理学部で学位取得後、日本学術振興会奨励研究員を1年間続けられて初めての職が静岡でした。1970年当時は、学生運動激しかりし頃、静岡大学の地学関連の教官は、理学部に3名（土先生と黒田先生と新任池谷先生）、教養部2名（地学会の生みの親ともいえる鮫島先生と伊藤先生）、教育学部3名（岩橋先生、新任徳山先生と新任藤吉先生）、農学部1名（加藤先生）の合計9名でした。9名のうち3名が新任教官で占めるような事は、滅多にはありません。そして分野の広い地学教室は学部で独立しては成り立たなく、講義も理学部と教育学部が総動員での合同の授業が展開されていました。当時の地学会は、理学部長をされた桐谷先生を会長とし、教養部に所属していた鮫島先生、伊藤先生が大学側の窓口として、教育学部の地学教室の事務をされていた半田孝司技官が事務長として運営されておりました。貧しい学生の我々は、地学会には巡検に参加する機会を利用させていただくくらいでした。当時から、今に至るまで地学会を支えてきた会員の顔ぶれは今日まで変わっていない人も多く、池谷先生も、地学愛好家という熱烈に山野を歩き、ハンマーを振りかざし、5感を総動員して足下の岩石から化石を掘り出し、顕微鏡下で見る鉱物の色鮮やかな光学に目を見張る、野外で地球を知る事を楽しむエネルギーが満ちあふれていた事を感じられていたと思われまます。

池谷先生が描いていた念願の地球科学教室はすぐには完成せず、東京大学に一時戻られておりましたが期が熟し、1976年待ちに待った地球科学教室が誕生する事になり、池谷先生は助教授として再び登場します。静岡大学をレベルの高い研究のできる教室とするため、「特色と実力をあいつけた人材」を集め、静岡県地学会にも地方の地学現象の探求にとどまらず、世界でどのような研究をしているかの最前線とともに味わう事のできる刺激をいつも与えてくれる機会を多く設けてくれるアイデアマンでもありました。

池谷先生の専門とする研究分野は微古生物学、2度目の着任当時、有孔虫の研究を学生にも地学会会員にも伝えるべく、静岡地学に3回連続で掲載、北里 洋・池谷仙之の連名で「小型有孔虫カタログ」を発表し、新しい学問分野への勧誘をされました。このとき池谷先生ご自身は、有孔虫から貝形虫という微生物に視点を換えられてはありましたが、その頃のまさに新しい分野、進化古生物学の普及につとめられました。とは言うものの、最新の研究分野で顕微鏡を頻繁に使う微古生物学は地学会会員にはなかなか浸透できませんでした。しかし、遠慮がちな会員に対して、常にくる者は拒まず、国際会議で企画した巡検にも会員参加を促すなど研究フロンティアに接する機会を提供して下さり、その醍醐味に満喫された方もおられました。

池谷先生が会長になられてから、会員の平均年齢が毎年1年ずつ増加するような地学会をどうした

ら元気の出る集団とすることができるか、地元の地学会のすべき事とは何かを会員が自ら議論し編み出すための機会を作ってくださいました。榛原町坂部に居を移し、茶畑の広がる谷間にある400坪の恵まれた自然環境の中に主だった人を招いて、バーベキューの煙とともに夜遅くまで議論は尽きませんでした。

現在、NPO活動に積極的に参加し、その母体となっている県内の各種研究会や同好会の人々との連携を強めるため、例によって池谷さんのお宅で一緒にバーベキューを囲み、活動のアイデアを練っていきました。このような心置けない人間関係は今後もこれから生まれる博物館の支援組織として残り、大きな宝となることになるでしょう。池谷先生を常に支えてくださった奥様の千恵子様には、お世話する大変なご苦勞をいとわずいつも笑顔で迎えていただき本当にお世話になりました。今後、実現の見えてきた静岡県自然史博物館（富士の国博物館となるのでしょうか？ Fujinokuni Museum）設立に向かって、先生のご意志を実現させるべく、全国的に設立には後れを取ったものの、静岡県自然史丸ごと博物館となるような、限られた研究スタッフの充実と、スタッフを支える専門分野の支援組織間に縫い目の無い機能を持つものに仕上げていかなければならないと、強く強く心を新たにしております。

池谷先生、本当にありがとうございました。残された我々は、先生の言の葉を常に覚え、地学の普及のため、そして、理想の自然史博物館設立のための努力を惜しまずに邁進することを誓います。安らかにお眠りください。

池谷先生、本当にありがとうございました。残された我々は、先生の言の葉を常に覚え、地学の普及のため、そして、理想の自然史博物館設立のための努力を惜しまずに邁進することを誓います。安らかにお眠りください。

なお、池谷先生のご遺骨は、近親者のみによる葬儀の後、池谷家の菩提寺である静岡県駿東郡小山町柳島の本連寺にご両親とともに納められております。また、池谷先生の学問的な業績等詳細な追悼文は、静岡大学理学部塚越さんが古生物学会和文誌に（化石89号，2011. 3月）、NPOでの活躍については、副理事長三宅 隆さんが機関紙に（自然史しずおか，31号）掲載されております。



図2. 2005年坂部ご自宅の自作ツリーハウスと池谷先生。